

『埼玉の古墳出現』断章

利根川章彦

1 はじめに

日本考古学において、「古墳の出現」は古くて新しい問題である。ここ30年くらいの研究によって、奈良県桜井市箸中山古墳(箸墓、大市墓)が「最古の古墳」の位置づけをされるものとしてほぼ確定してきたと言ってよい。ただし、この古墳が「陵墓」であるがために、古墳周囲の断片的な出土品情報と、『書陵部紀要』に示された墳頂部採集の埴輪・土器しかなく、周堀の形態さえも詳細が知られているわけではなく、ややまとまった面積の調査が行われるたびに、周堀の形態の想定案さえも変化してきた。したがって、最古の「定型化された前方後円墳」という評価も含めて、十分な吟味が必要であろう。

こうした調査・出土品情報の僅少さについては、各地域の初期古墳においても同様についてまわる問題である。それが古墳出現の様相の認識や比較検討を困難にしている、と筆者は考えており、意外と研究が進展しない原因の一つである。

筆者は、古墳時代に移り変わる時期前後について、二重口縁壺・高坏・北陸系装飾器台などの土器群を検討してきた。そこで学んだことの一つは、関東においては、墳墓出土土器群の器種が細かく共通するものがあまり多いとは言えず、時期確定がむずかしいということである。

本稿で考えてみたいのは、埼玉県域で古墳時代初期の「古墳」・「墳墓」から出土した土器から考えられる時期の確認であり、もっと具体的に言えば、筆者が埼玉最古と考える、吉見町山の根古墳の年代の認識を現在も維持できるのかどうかである。

2 県内初期古墳等の最近の調査・研究について

ここ20～30年くらいの間に、埼玉県においては、遺跡詳細分布調査や県史・市町村史などの編纂に伴って実施される確認調査によって、初期古墳・古墳時代初期の墳墓の、それまでわかっていなかった考古学的情報が追加され、各地の「古墳出現」認識を少しずつ変更している。代表的な調査例をあげておくと、埼玉県古墳詳細分布調査事業で調査された吉見町山の根古墳・東松山市根岸稻荷神社古墳、『新編埼玉県史』編さん事業の一環で実施された「埼玉県古式古墳調査」で調査された東松山市諏訪山29号墳・東松山市雷電山古墳・川越市三変稻荷神社古墳・桶川市熊野神社古墳の資料が新たに判明した。各市町村においても、圃場整備・土地改良事業にかかって緊急調査された吉見町三ノ耕地遺跡、保存目的の調査で前方後方墳・前方後方形墳墓が確認されたふじみ野市権現山墳墓群・熊谷市塩古墳群・本庄市鷲山古墳など資料の蓄積が進んできた。

さきたま史跡の博物館においても、平成21～22年度に実施した企画展『稻荷山出現以前の古墳』において、これらの古墳・墳墓から出土した土器群や埴輪の一部を展示し、古墳出現期から前期後半の県下の古墳の築造状況についての現状認識を考察し、展示公開した。

筆者は、本誌の前身である『調査研究報告』誌上で、吉見町山の根古墳出土土器を検討し、古

墳の年代を想定した(利根川1995)。1995年当時は日本考古学協会新潟大会のシンポジウム『東日本における古墳出現過程の検討』の資料集により提示された所謂「新潟シンポ編年」がかなり信頼性の高い基準のような扱われ方をしていた。そこでの段階設定に合わせて、山の根古墳の年代は7期に相当し、4世紀初頭、場合によっては3世紀末葉に遡及する可能性もあることを指摘した。しかも、埼玉最古の古墳であると考えた。

その後の研究として、まず最初に小坂延仁氏のものを取り上げておきたい。小坂氏は2009年の第14回東北・関東前方後円墳研究会大会「前期古墳の諸段階と大型古墳の出現」の埼玉県域を対象にした報告の資料に示されている(小坂2009)。

この報文で、小坂氏は和田晴吾氏の古墳編年(以下「和田編年」と呼ぶ)・前方後円墳研究会の「共通編年」(小坂氏は「集成編年」と呼ぶ)・赤塚次郎氏の「廻間編年」・寺沢薫氏の弥生後期～古墳時代中期の土器編年(いわゆる「矢部編年」)・田嶋明人氏の「漆町編年」を対比する編年表に「県西」という枠を加えたものを提示している。小坂氏の「県西」I期は、寺沢氏の「庄内3式」、赤塚氏の「廻間II式前半(II-1～2段階)、田嶋氏の「漆町5・6群」に対応し、「和田編年」・「共通編年」の1期より古い段階とされている(第1図)。この段階に東松山市「根岸稻荷神社古墳」を置き、「埼玉最古」の含みを残しつつ、柿沼幹夫氏の「墳丘の遺存する大型方形周溝墓」説(柿沼1996)を紹介している。この報告での問題点は、かつて坂本和俊氏がより古く編年していた南志渡川遺跡第4号墓のパレススタイル壺を含む土器群より、「根岸稻荷神社古墳」の土器群の方を古く見ていること、及び、吉見町三ノ耕地遺跡の3基の前方後方形周溝墓を、丘陵上の山の根古墳の土器群より古く見ていることである。これらの土器群の編年上の序列については、少し個別に考え、小坂氏の認識が信頼に足るものか検討する。

三ノ耕地遺跡の「2号墳」・「1号墳」と山の根古墳の出土土器で、唯一共通するのは坏部の大きな東海系高坏だけである。土器全体のプロポーションから考えるなら、最も坏部が深い三ノ耕地「2号墳」が「欠山式」の高坏に近い形態を保持しており、「1号墳」は坏部がやや浅くなっており、確実に1段階新しい。一方山の根古墳の高坏は、坏部がかなり深身に作られているが、脚部が裾広がり「元屋敷式」の形態に変わっている。坏部・脚部の変遷の序列は、「2号墳」→山の根古墳→「1号墳」と考えるべきではないか、と筆者は考えている。また、三ノ耕地「1号墳」・「2号墳」は、一般的な意味で供献土器ばかりになっているのに、山の根古墳は、甕・鉢のような、飲食器・煮炊具をやや多く含んでいる。

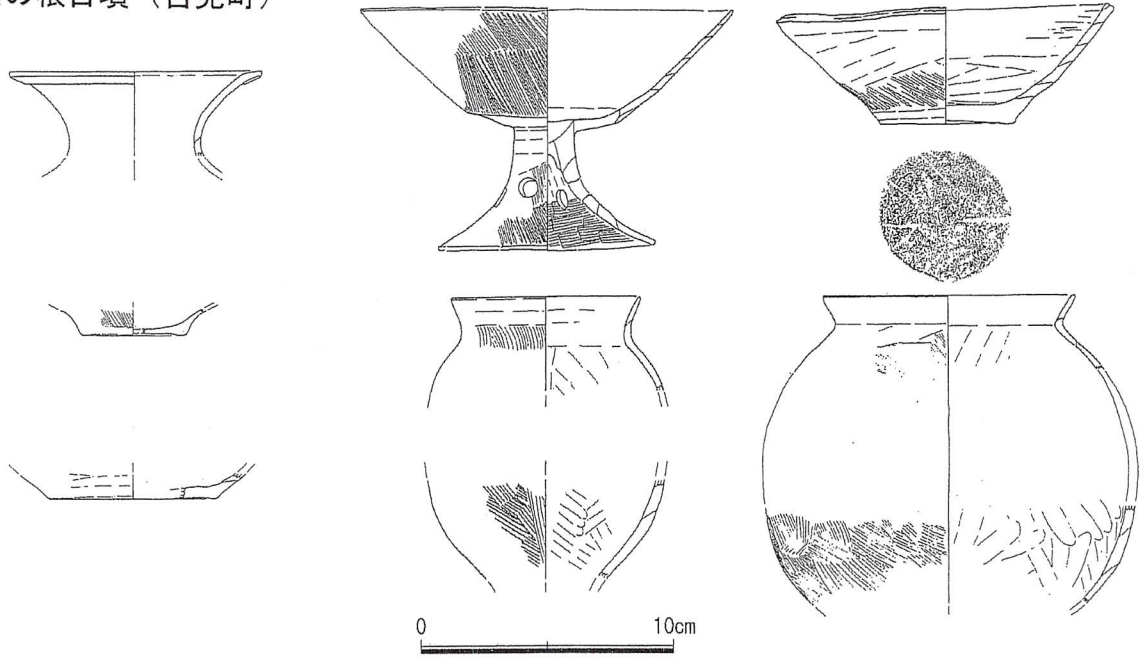
しかも、「1号墳」は二重口縁壺・小型高坏、「2号墳」は小型埴形土器・小型壺のような近畿地方の布留1式に含まれそうな器種を伴う。これは山の根古墳より、むしろ三ノ耕地遺跡の周溝墓群の年代を新しく考える根拠になる。もう一つ気になるのは、山の根古墳には、幅狭の折り返し口縁を持つ壺があるのに二重口縁壺がないことである。調査範囲の関係で出土しなかった可能性もあるが、三ノ耕地「1号墳」に平底・焼成後穿孔の二重口縁壺があることを比較すると、山の根古墳より「1号墳」を古く見る根拠は弱いと考えられる。筆者の見るところでは、三ノ耕地遺跡の3基の前方後方形周溝墓は、山の根古墳より間違いなく古くなりそうなものは「3号墳」のみである。しかも、三ノ耕地遺跡は低地帯にあり、各墳墓の墳丘の高さも3m以下の低墳丘と考えられる。

やや類似した環境にある「根岸稻荷神社古墳」も低墳丘で20m代の主軸長しかないことを考え

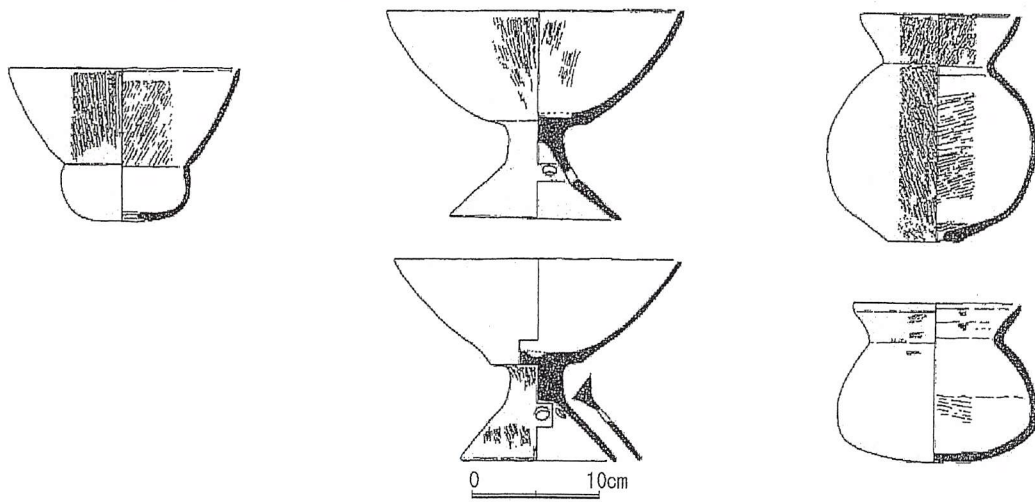
畿内土器編年 寺沢 1986	廻間編年 松河戸編年	漆町編年	県西	集成編年	和 田 編 年	北 武 蔵			南 武 蔵		
						比企（入間）	児玉・本庄	大宮台地			
庄内3式	前 半 II式	5・6群	I期	1期	一期	根岸稲荷神社古墳					
						三ノ耕地2号墳					
布留0式	II式後半 III式1	7群	II期	2期	二期	三ノ耕地1号墳	権現山2号墳	南志渡川4号墓	塚本山33号墓		
						山の根古墳	広面S Z 9	南志渡川5号墓	石蒔B遺跡8号墓		
布留1式	III式1・2・3	8群	III期	3期	三期	諏訪山29号墳	塩7号墳	権現山7号墳	南志渡川1号墓	石蒔B遺跡2号墓	塚本山14号墓
						天神山古墳	塩1号墳	中耕S R 42	南志渡川2号墓	石蒔B遺跡2号墓	塚本山14号墓
布留2式	III式1・4	9群	IV期	4期	四期	諏訪山古墳	三変稲荷神社古墳	村後遺跡周溝墓	熊野神社古墳	白山古墳	稲荷前16号墳
						塩2号墳		鷺山古墳	宝来山古墳	親音松古墳	
布留3式	松河戸I	10群	V期	5期	五期				高福荷古墳	亀甲山古墳	
									江川山古墳	砧中学校7号墳	
布留4式		11群	VI期	5期	六期						
						雷電山古墳			志渡川古墳	殿山古墳	了源寺古墳

第1図 小坂氏作成の埼玉県初期～前期古墳編年図

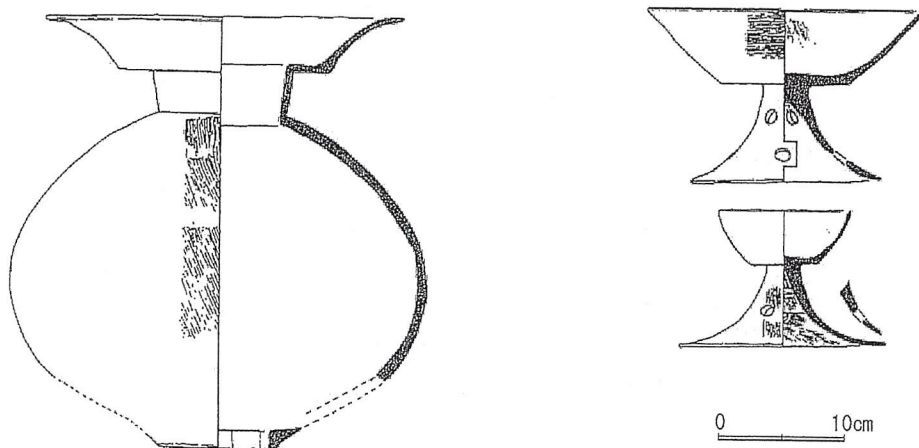
山の根古墳（吉見町）



三ノ耕地遺跡 2号墳（吉見町）



三ノ耕地遺跡 1号墳（吉見町）



第2図 山の根古墳・三ノ耕地遺跡土器比較図

ると、主軸長30m代までの小規模低墳丘墓群の造墓活動が松山台地周辺・吉見丘陵南方の低地帯や微高地上で、古墳時代初頭前後頃に活発化しているようである。その継続期間中に何らかの契機で丘陵上に主軸長50mを越える古墳を築くようになった、と理解すべきではないか、と考えている。

ちなみに、「根岸稻荷神社古墳」からは単純口縁の小型壺が出土している(君島2010)。この土器の胴部は布留式に特有の横方向の入念なヘラミガキが施されており、年代が布留1式併行期まで下降する可能性も出てきている。この点については稿を改めて考えてみたい。

山の根古墳の年代は「廻間Ⅲ式第1段階」である、という理解は変更の必要を感じていないので、むしろ三ノ耕地遺跡の墳墓群の年代を小坂説より新しく考えるべきであると提案しておきたい。

次に、小坂氏が依拠していた石坂俊郎氏の見解について考える。小坂氏の説のうち、三ノ耕地遺跡の「3号墳」→「2号墳」→「1号墳」の継起的築造の後に、山の根古墳が造られるという発展段階的ストーリーは石坂氏の描いていたものであった。以下、少々長くなるが引用したい(石坂2006)。

「……①～③の各遺構からは多くの土器が出土しており、パレス壺の存在など、東海系との関連が瞥見しただけでも目を引く。総量は当地としては圧倒的といえ、精密な編年的分析が期待される。前方後方墳についてあえて推測を進めるなら、最南に位置し規模最小、田中分類B2・3型とみられる3号墳が最古、1・2号墳は位置ばかりでなく時間的にも近接するとみられ、前方部の規模が3号墳に近い2号墳が1号墳に先行、そして1号墳の次には、山の根古墳が自然堤防を離れ北方の尾根上に造営されるという、3世紀後半から4世紀前半にかかる前方後方墳4代の発展的展開が想像される。その間後方は遺構ごとに順次拡大するが、前方部は2号墳と1号墳の間で飛躍的に発達し、1号墳は他の古墳と立地をともにしながら、規模では山の根古墳に一段と近づいているといえようか。……(後略)……」

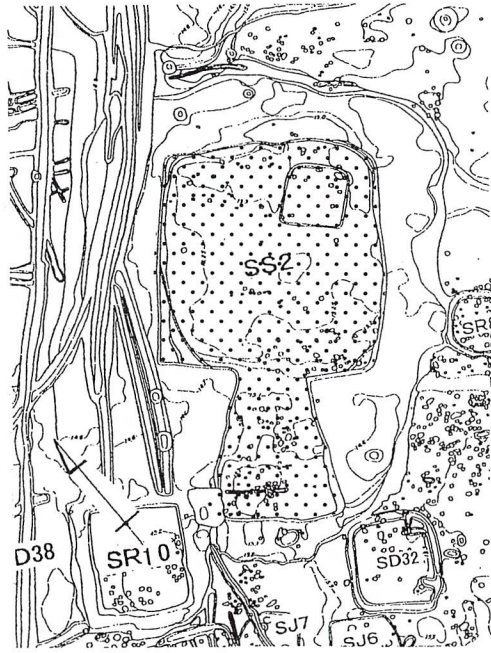
石坂氏は、三ノ耕地遺跡にかなり大量の東海系土器、特にパレススタイル壺が出土していることを根拠に、山の根古墳より古いと見ているようである。しかしながら、「1号墳」に関しては、十分吟味しなければ山の根古墳に先行するかどうかはわからない土器のセット(二重口縁壺・小型高坏・坏部の浅くなった高坏)を有しているのに、それは問題にしていない。小坂氏は、石坂氏が描いたストーリーが一見納得しやすい流れになっているため、そのまま依拠してしまったようである。

しかし、三ノ耕地遺跡のパレススタイル壺は、尾張や伊勢で出土する定型的なものとは異なり、在地化したために本来の装飾領域や施文手法を逸脱した胴部文様帯を有するものが多い。一見古く見えるものでも、廻間Ⅱ式前半期まで遡るものはほとんどないと考えられる。したがって、土器群に新旧の時間差があると想定したとして、たとえその中の古い一群を比較の対象として考えたとしても、山の根古墳出土土器群の年代との時間差はあまりない、と考えた方がよいし、新しい一群は山の根古墳より古くできるかどうかについては論証する必要がある。

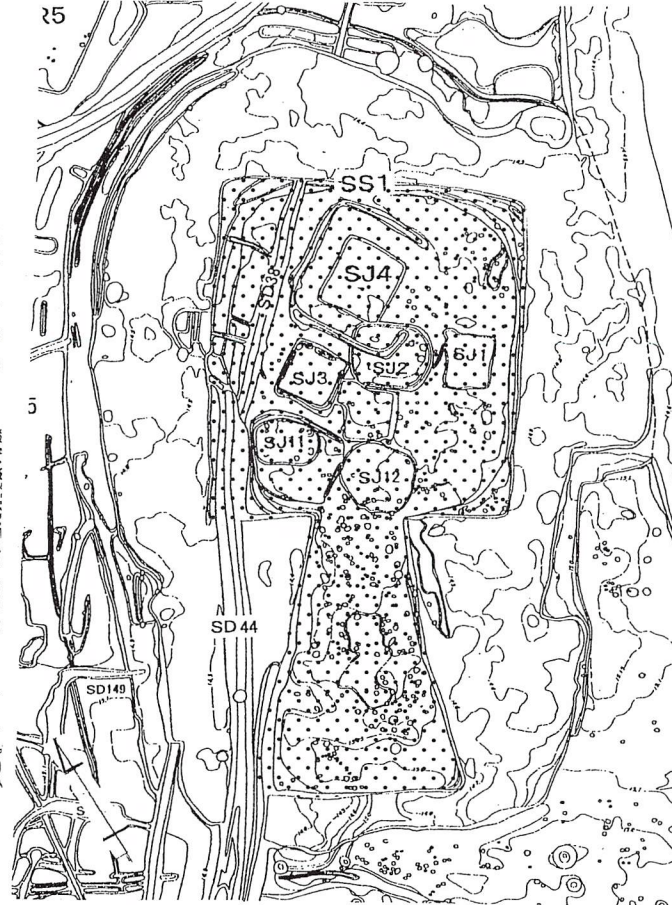
さらに、「前方部の発達」にも疑問がある。三ノ耕地「1号墳」は、前方部の長さだけでなく幅も拡大している。山の根古墳は前方部の幅は小さい。もし、後方部と前方部の平面積比の比較を行ったなら、山の根古墳と三ノ耕地「1号墳」の違いはけっこう大きく、「1号墳」の前方部の

三ノ耕地遺跡1・2号墳(埼玉県吉見町)

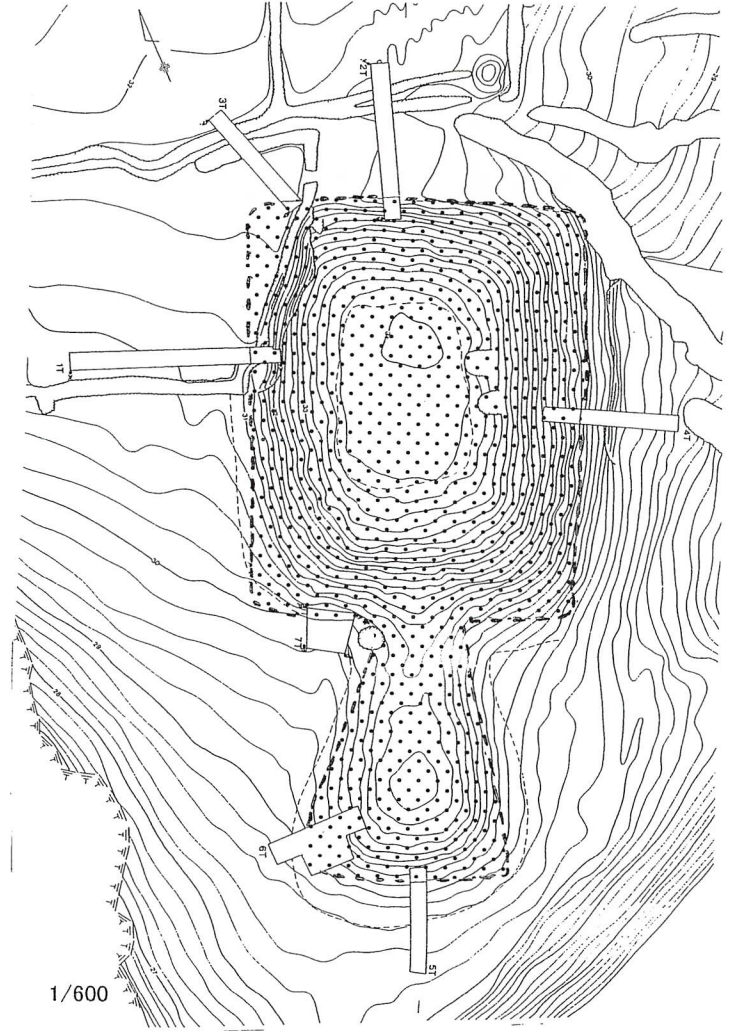
山の根古墳(埼玉県吉見町)



2号墳 1/600



1号墳 1/600



1/600

第3図 山の根古墳・三ノ耕地遺跡墳形比較図

方がやや発達している、と言ってよい。

ゆえに、小坂説だけでなく、石坂説を考慮したとしても、三ノ耕地「1号墳」が山の根古墳に先行すると考えるのは根拠が薄いと考えるべきでない。

小坂説・石坂説の検討の結果、利根川旧説の山の根古墳の築造時期を「廻間Ⅲ式第1段階併行」とみたことは今のところ変更の必要はないと考えている。また、三ノ耕地遺跡の3基の墳墓も「根岸稲荷神社古墳」も「古墳」と考えるより前方後方形墳丘墓のカテゴリーで考えるべきで、「古墳」の領域をはずれるものであるため、山の根古墳が埼玉最古の古墳であるという位置づけも維持できるのではないかと考える。

3 その他の問題

さて、ここまでで本稿の目的を達してしまっただけであるが、今後、「埼玉の古墳出現」を考える際に大きな課題となってきそうなことのいくつかに触れておこう。

まず、東松山市反町遺跡とその周辺である。反町遺跡は、東松山市南部の高坂台地を北に下りた低地帯にある。古墳時代前期に形成された水路跡と堰跡が検出され、竪穴住居群の中には水晶を加工した玉造り工房も含まれていた。種々の検討の結果、この水晶は山梨県方面からもたらされたと考えられている。2011年になって、東松山市教育委員会の調査により、反町遺跡所在地のやや西方の台地上の宅地造成に伴う発掘調査で、だ龍鏡・管玉・水晶製勾玉等を出土した古墳が検出されたが、どうやらこれは4世紀後半頃の小型前方後方墳になりそうである。高坂古墳群と呼ばれる古墳群の中の1基である。さらに、この古墳に隣接して築造されたい古墳から出土したとされる三角縁二神二獣鏡が出土した。こわれていたが、11点ほどの破片が出てきて、全体が残存していたことがわかった。埼玉県で初めて出土した三角縁神獣鏡である。この古墳群の近傍に、古式古墳調査の行われた諏訪山29号墳(前方後方墳)、古式な墳丘形態と考えられている諏訪山1号墳(前方後円墳?)を含む諏訪山古墳群もある。古墳時代前期の集落遺跡・生産域・墓域を一括して理解できる地域となってきた感がある。「埼玉の古墳出現」を考える際、この遺跡群について、今後は、吉見町の三ノ耕地遺跡・山の根古墳付近の遺跡群とともに重要視する必要があるだろう。

ところで、同じ小地域エリアの中に埼玉県屈指の大型前方後円墳である、野本將軍塚古墳がある。金井塚良一氏は、この古墳の年代の位置づけを「5世紀後半から6世紀前半」と考えていた(金井塚1979)。しかし、かつて墳丘上や古墳周辺から埴輪が採集されることがないということであり、坂本和俊氏によって、埴輪が伴わない時期の古墳として、共通編年6期以前か10期という想定をされていた(坂本1990)。

1978年に東松山市史編纂事業の一環で、野本將軍塚古墳後円部墳頂の中央部分において、埋葬施設存否の確認のため、ハンドオーガーという土層堆積確認の掘削具によって、直径10cmほどの小穴を合計4か所あけて確認するという作業に携わったことがある。4か所のうち2か所から、深さ1.5mほどの深さの位置にかなり粘性の強いきれいな白色粘土が堆積していることを確認した。厚みもかなりありそうなことから、横穴式石室天井石と考えることはできそうもなく、「粘土槨」の天井かな、とも考えた。残り2か所でも礫まじりの強粘質粘土層に到達し、天井石の一部に到達するという状況にはなかったため、それだけの調査で終了した。しかしなが

ら、当時、甘粕健氏による古墳時代前期説(甘粕1976)が出ていたことを考えると、その時点で「竪穴式石室」ということも考えてしかるべきだったかもしれない。

後円部墳頂は、利仁神社という神社の境内であるため、発掘することは将来を含めてもまず考えられない。そのため、やはり埋葬施設は不明である、とせざるをえない。

周辺から確認される考古学的情報も古墳時代前期に偏ったものが多いのはなぜか、と誰もが考えている。筆者としては、漠然とはしているが、野本將軍塚古墳は4世紀半ばから5世紀初頭くらいまでのどこかの時期に築造された、と考えている。埋葬施設も、その上面より上の位置にやや分厚く白色粘土を積む、という状況から考えるなら、竪穴式石室か、入念に造られた古い段階の粘土槨のどちらかと考えるべきではないか、と思っている。

4 おわりに

ここまで、ややとりとめもなく記述してきた。山の根古墳の年代をめぐるの話は、平成22年度のさきたま講座「埼玉における古墳の出現」の中で講じたことの一部であるが、本稿と細部まで一致しているわけではない。野本將軍塚古墳情報は、もっと後になってから言うべきこととも考えたが、次第に高坂台地周辺の古墳時代遺跡の情報が蓄積されつつあり、それならこの際、微々たる情報であっても出しておこう、と思っただけのことである。

今後、機会があったら、まさに「埼玉における古墳の出現」を列島の視点から解明したいと考えているが、土器の編年論・年代論に関しての最近の各氏の見解の蓄積は、筆者の理解力を大幅に越えている。いつになったら、書くことができるのかは漠としていて申し上げることはできそうもない。

それでも、講座の中で話したことの一端だけでも見解表明して、大方の判断に委ねたいと思う。それが執筆の動機であって、それ以上でも以下でもない。タイトルを「断章」とした所以である。

《引用・参考文献》

- 甘粕 健 1976 「三千塚古墳群に関する覚書」『北武蔵考古学資料図鑑』 校倉書房
- 石坂 俊郎 2006 「南関東の様相—埼玉・千葉・東京・神奈川—」『第11回東北・関東前方後円墳研究会大会《シンポジウム》前方後方墳とその周辺』(発表要旨資料) 東北・関東前方後円墳研究会
- 柿沼 幹夫 1996 「『方形周溝墓』出土の土器 北関東 ①埼玉県」『関東の方形周溝墓』 同成社
- 金井塚良一 1979 「野本將軍塚古墳の謎」『歴史読本』1979年5月号 新人物往来社
- 君島 勝秀 2010 『企画展 稲荷山出現以前の古墳』(展示図録) 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 小坂 延仁 2009 「埼玉県における前期古墳の諸段階と大型古墳の出現」『第14回東北・関東前方後円墳研究会大会《シンポジウム》前期古墳の諸段階と大型古墳の出現』(発表要旨資料) 東北・関東前方後円墳研究会
- 坂本 和俊 1990 「武蔵」『前方後円墳集成 東北・関東編』 山川出版社
- 利根川章彦 1995 「吉見町山の根古墳の年代について」『調査研究報告』第8号 埼玉県立さきたま資料館